

少年

SYOUNEN
KI TO
INTELLI

犬



AUTHOR KANTO

原作：カント

ILLUSTRATION TYAZAKURA

イラスト：茶桜

©

Asian Kung - Fu Project



CONTENTS

- 00 フロローグ
- 01 ゲーム・I
- 02 ゲーム・II
- 03 ダイク
- 04 一日・昼
- 05 一日・昼 2
- 06 一日・夜
- 07 二日・夜
- 08 三日
- 09 エピローグ

00 プロローグ

肉を引き裂く音が、生温い大気を震わせていた。

空には、半月。眼下の真つ暗な森を、山を見下ろす、割れた黄金。その光は弱く、しかし狂おしい程に美しく、大地の闇を包み込む。

対する大地は、沈黙。闇という仕切りを挟んで、無言で天を見上げている。

そう、そこには静寂があつた。夜行の鳥が鳴く声も、外敵の居ない時間を悟る虫たちが奏でる音色も、蒸すような空気を運ぶ風が立てる音も、それに揺さぶられる木々のざわめきでさえもが、不可思議な沈黙を保っている。まるで、何かにおののいているかのように。まるで、“彼”の作り出す音の中に、自分たちが巻き込まれないようにするかの如く。

……他の全てが黙りこくる中、“彼”は一心不乱に眼下の肉片を喰らい続ける。飛び散る熱い液体は“彼”の肌を滴り落ち、口内に入った肉片は“彼”の喉の奥へと滑り落ちていく。

その行為を妨げるものは、妨げられるものは、その瞬間、どこにも存在してはいなかった。

やがてふと、“彼”は口の動きを止めた。そして、体の下の肉片——衣服と肉体を無惨に引き裂かれた、小さな人間の子供——を、じっと見つめる。

大きくえぐられた喉、露出した胸骨、ビクビクと微かに脈打つ臓物の残り。“彼”の体躯によって、月光すら遮られたその姿に、生命を感じられる者は皆無だろう。

しばらくの静止の後、“彼”はゆっくりと周囲を見回した。自らを遠巻きに眺める木々、近くで小さく風に揺れる草花、地にまき散らされた液体。全てが、“彼”を見つめている。何も言わず、何も訴えず。ただ、無言で。

……ゆっくりと、“彼”は残骸から体を退けた。そしてそのまま、何かに誘われるかのように、自分と残骸の周囲に散らばる物体——激しく傷付いた、数匹の狼の遺体へと向かっていく。

立ち止まり、眼下の遺体を見つめる“彼”。

完全な沈黙が、森を、空を、包み込む。そして——。

「……つぎは……」

——小さく。再び響き渡り始めた肉を引き裂く音の中に、微かに混じった、幼い声。気付かないのか、振り向こうともせず、“彼”は食事を続ける。

しかし、それには構わず。声は——肉塊となったはずの、幼き子供は——再び小さく、呟くよ

うに言った。

「つぎは……まけない……」

——血まみれのその唇で、笑うように——。